

上古中国語音韻体系瑣説

『長田夏樹論述集（下）』第4章

(原載：『中国語学研究会関西月報』, 1950年3月)

印欧比較言語学の例を引きながら、上古音研究の問題点すなわち「明らかに成立年代に幅のある諧声文字、仮借を、ある限定された時代にあてはめている」という点が鋭く指摘されている。その克服のためには、シナ=チベット語の比較研究が必要不可欠だというスタンスである。長田先生の説ではタイ語はシナ=チベット語族のシナ=タイ語派に属する(第3章・第12章)。

まず声母については、タイ諸語の比較言語学的研究の成果に基づき、上古音にも tt' dd' 、 pp' bb' のような四系列を認める。B.Karlgren と同じく定母や並母を有声有気音 (d' b' など) と再構しているが、Karlgren とは異なり、 b には「陌」(中古明母)などを考える。

韻母については声符を中心に説明がなされる。「紙面の都合により一部のみ」しか挙例がなされなかったことが惜しまれる。韻部の名は一般と違うので対照してみたい。以下太字の名が長田先生の二十六部。このうち「室部」はもと「臺部」となっていたがミスプリであろう。

陰類	:	魚部	支部	之部	侯部	宵部	幽部	歌部	脂部	微部				
		余部			句部			戈耑部		佳部				
入類	:	鐸部	錫部	職部	屋部	藥部	覺部	月部	質部	物部	葉部	緝部		
		昔部	束部	有部	東部	高部	攸部	祭部	室部	喬部	去部	執部		
陽類	:	陽部	耕部	蒸部	東部		中部	元部	真部	文部	談部	侵部		
		方部	熒部	宀部	工部		牟部	爰部	辰部	良部	兼部	覃部		

支之宵幽の諸部は入類の一種 (-g) と見なされている。清朝考証学者と同じく、脂部・微部は区別されていない(すなわち佳部)。陰声の再構音は以下のとおり：余部 \hat{a} 、句部 o 、戈部 a 、耑部 ar 、佳部 α 。

入類の再構音について B.Karlgren や最近の学説との比較をしてみれば以下のとおりである。

	昔部	束部	有部	東部	高部	攸部	祭部	室部	霽部	去部	執部
長田先生	ak	ek	ək	uk	ok	ôk	at	et	ət	ap	əp
	鐸部	錫部	職部	屋部	藥部	覺部	月部	質部	物部	葉部	緝部
B.Karlgren	âk	ek	ək	uk	ok	ôk	ât	et	ət	âp	əp
李方桂	ak	ik	ək	uk	akw	əkʷ	at	it	ət	ap	əp
W.Baxter	ak	ek	ik	ok	awk ewk	uk iwk	at et ot	it ik	it ut	ap ep op	ip up

声調については、「平（平音）上（揚音）去（抑音）」の三種、入声には去声と同じ調値を考慮しておられたことが第 3 章からわかる（更に声母の清濁により各二種に分かれるとのこと）。なお第 35 章では陰入陽の対転についての紹介と議論がなされている。

参考文献

Baxter, W. H. 1992. *A Handbook of Old Chinese Phonology*. Berlin; New York: Mouton de Gruyter.

Karlgren, B. 1957. *Grammata Serica Recensa*. Stockholm: The Museum of Far Eastern Antiquities.

(*Grammata Serica*. 1940)

李方桂 1971. 『上古音研究』, 『清華學報』 新 9 卷 1・2 合卷（北京商務印書館：1980）。

（古屋昭弘）